文 川淵美里
絵 圖司果歩

しらないのまち

しらないのまち

文 川淵美里 絵 圖司果歩

文 川淵美里　絵 圖司果歩

なきながらいえをとび出して
おきに入りのジャングルのこうえんをはしってはしって
ぼくはきがついたらしらないまちにいた。

ないてすっきりしたぼくは
うちにかえろうとするのだけれど
めじるしにしてたこうえんもお店も
どれだけあるいても見つからない。
しらないみちに　しらないかんばん
じめんもしらないふみごごち

きのいえだらけのみちをすすむと
むこうから人がやってきた。
ふくはへんてこ　しらないふくで
かおはまっくろ　ごつごつしてた。
「わかった　ここは　おばけのまちだ」

「しらないのまちは
みんなにしらない、って言われたものが
やってくるんだ。
わたしもむかしはみんなのいえにいたんだよ」
「へえ。そんなのしらなかったや。
ぼく、おじさんみたことないんだもの」
ぼくがそういうと、おじさんはわらってくびをかたむけた。
あたまからリン、とさみしいおとがした。

「おじさん　さみしいんだね」
「ああ、さみしいよ。
みんながわたしのことをしらないと言うたび
わたしはどんどんさびていくようなきもちになるんだ」
おじさんは、かおのまんなかにあるすうじをさわりながら
けどね、とつづけた。

「わたしがわすれられるというのは
よのなかがまえにすすんだって
ことでもあるんだ。
きみたちのいえにはでんわがある。
わたしよりずっとべんりで
きれいなでんわだ。

わたしはわすれられて
ずっとここにいるけれど
きみたちのいえにいるでんわは
わたしがいないとうまれなかった。
わたしはそれがほこらしくて
たまらないのさ」

「ふうん。よくわからないけど
ものってたいへんなんだね。
ねえ、そろそろぼくうちにかえりたいんだ。
どうしたらいいかおしえてよ」

「ああ　おしえてあげようとも。えっとねえ」

そのとき、おじさんのあたまが
りんりりりんとなった。
とたんにおじさんは

「でんわだ　でんわだ　でんわです」

とはしっていって

まっかになった　じめんに　ぽつんと
ぼくのかげだけが　のこった。

「ゆうやけだ　ゆうやけがきた」
ぼくはあわててはしったけれど
どこにいってもうちはなくて
どこにいってもおかあさんはいなくて
ぐにぐに　ぺらぺら　へんなのばかりで
なみだがこぼれたそのときに
あたまのうえからこえがした。

「きみはどうして　ここにきたんだい」
みたことなくて　しらないけれど
ごつごつしてない　ぺらぺらでもない
ふつうの、しわくちゃの　おじいさんだった。
「おじいさん　ぼく　おうちにかえりたいんだ。
なんでここにきたのか　わかんないんだ」

「ああ　ああ　それはかわいそうに。
ほら、おうちは　こっちだよ」
おじいさんはぼくのてをにぎって
そうしてふたりで　とぼとぼあるいた。

「おじいさん　ぼく、おもいだしたよ。
ぼくね、おかあさんとけんかしたんだ。
それでね、あんたなんか　しらないっていわれたんだよ」

「おやおや、そうだったのかい。
それはきっと　しらないのまちが　かんちがいをしたんだね。
だいじょうぶ。おかあさんはきみのことをおぼえてるし
おかあさんはきみのことはだいすきだよ」

だからね、ちゃんとかえりなさい。
おかあさんともなかよくね。
おじいさんはそういって、ぼくのあたまをさらりとなでた。

きがついたら　ぼくはうちにいた。
かいだんのしたから
おかあさんによばれたきがして
ぼくはいそいで　かいだんをおりた。

「おかあさん」
ぼくがさけんだら、おかあさんはびっくりしていた。
「あのね、ごめんね、ぼくね、そのね」
「あらあら、こわいゆめでもみたの？
ねえ、ところで　これをみて」
おかあさんは　おおきながくぶちをとりだして
「これね、あなたのひいおじいちゃんよ。
そうじをしてたら　でてきたの」

「あっ、あのおじいちゃんだ！」
「あらあら、ほんとにねぼけてるのね。
あなたは　ひいおじいちゃんにあったことも
はなしたこともないでしょう？
なんにもしらない　はずでしょう？」
「うん。しらない。…だからね、」

「しらないから、おしえてほしいな！」

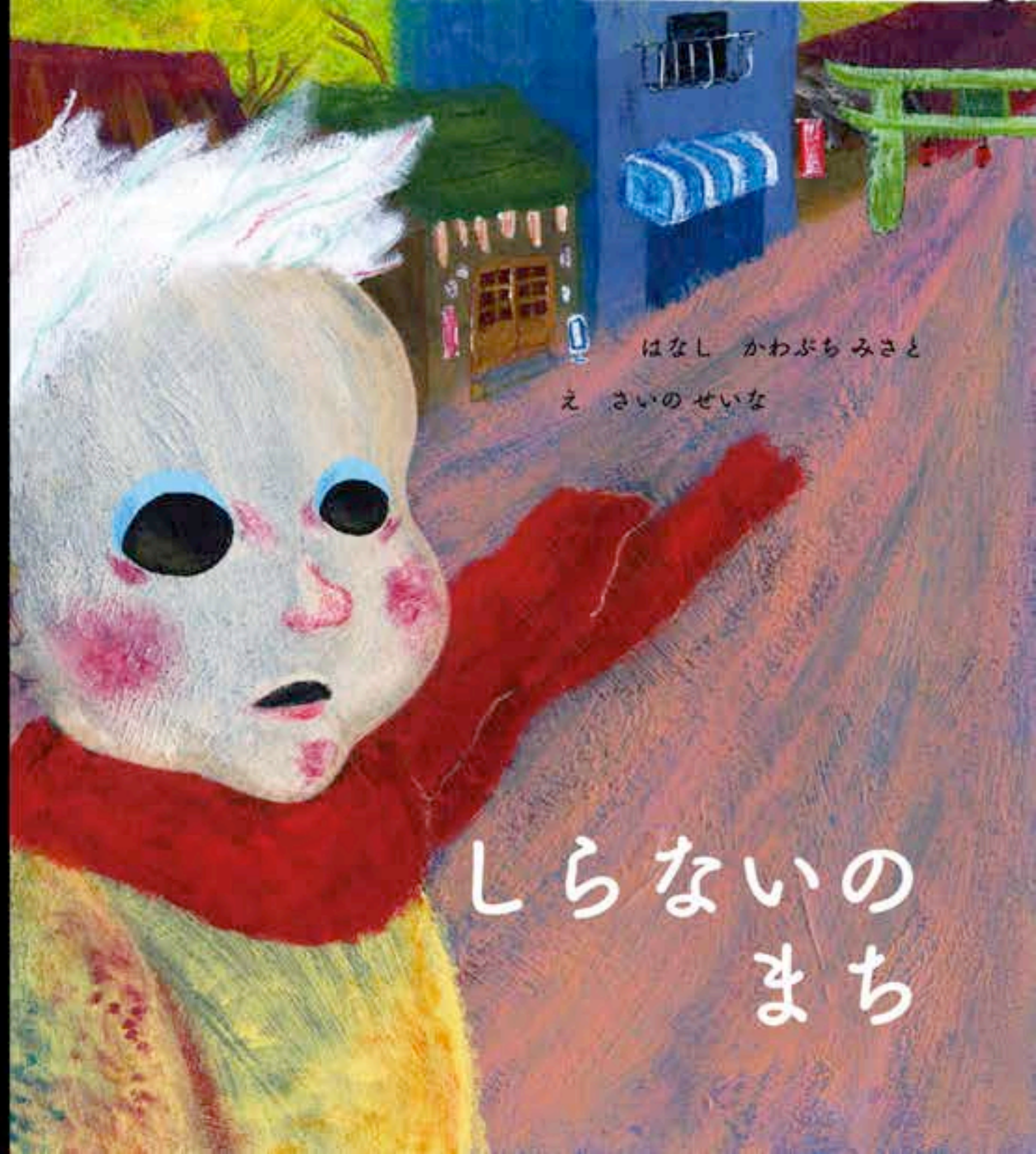
しらないのまち
二〇一三年十月二日　初版第一刷発行

著者　文／川淵 美里
　　絵／圖司 果歩
発行者　11V0049　圖司果歩
発行所　神戸芸術工科大学

しらないのまち

はなし　かわぶちみさと

え　さいのせいな



はなし　かわぶちみさと

え　さいのせいな

しらないのまち

しらないのまち

はなし　かわぶち みさと　　え　さいの せいな

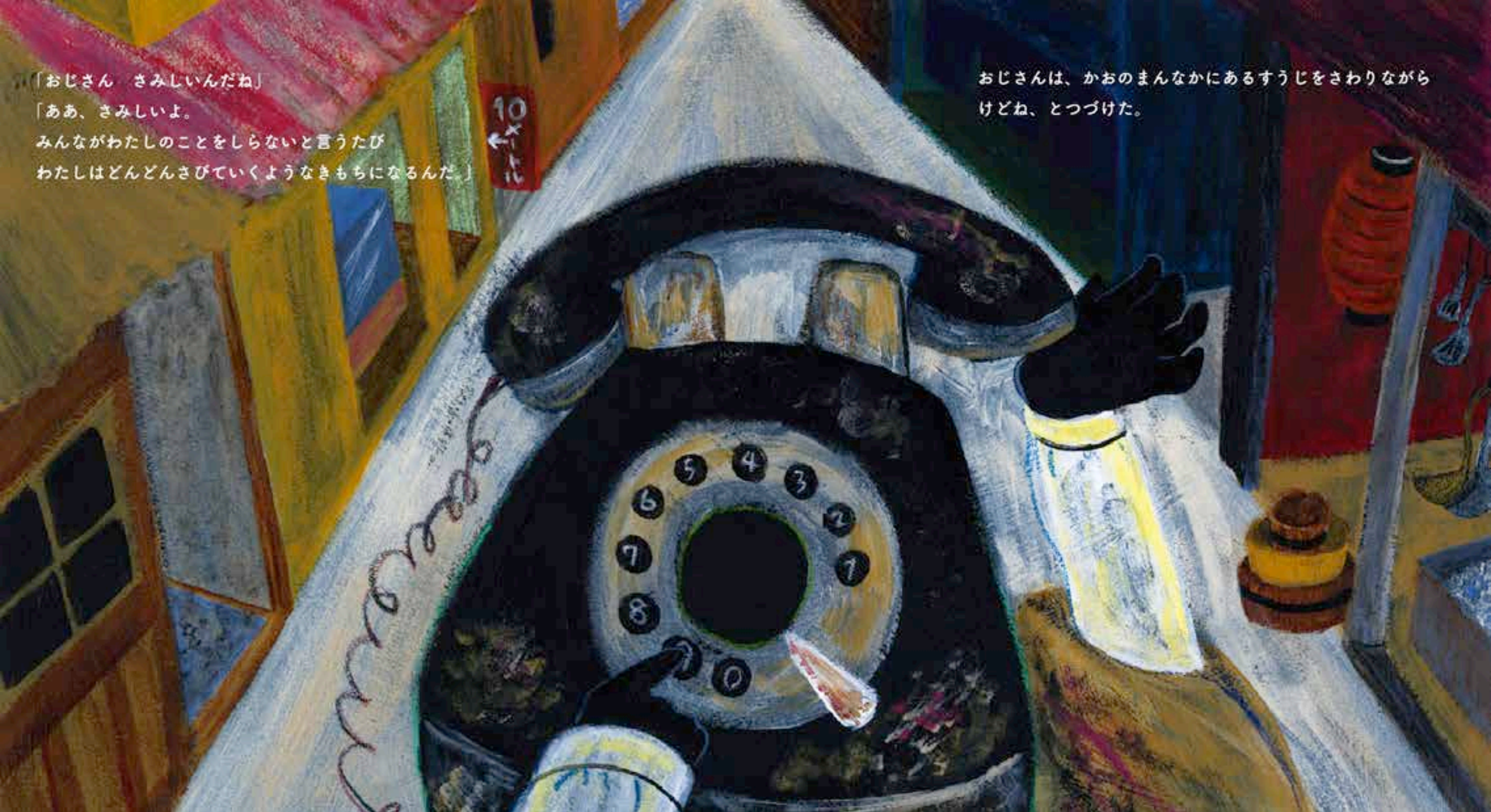
なきながらいえをとび出して
おきに入りのジャングルのこうえんをはしってはしって
ぼくはきがついたらしらないまちにいた。

ないてすっきりしたぼくは　うちにかえろうとするのだけれど
めじるしにしてたこうえんもお店も　どれだけあるいても見つからない。
しらないみちに　しらないかんばん　じめんもしらないふみごこち

きのいえだらけのみちをすすむと
むこうから人がやってきた
ふくはへんてこ　しらないふくで
かおはまっくろ　ごつごつしてた
「わかった　ここは　おばけのまちだ」

「おじさん　おじさん　おばけのおじさん
ぼく　うちにかえりたいんだ」
ごつごつおばけはわらっていった
「わたしのなまえはくろでんわ。
お化けじゃなくて、くろでんわ。
ここはふしぎな　しらないのまち」

「しらないのまちは、みんなにしらない、って言われたものがやってくるんだ。
わたしもむかしはみんなのいえにいたんだよ」
「へえ。そんなのしらなかったや。ぼく、おじさんみたことないんだもの」
ぼくがそういうと、おじさんはわらってくびをかたむけた。
あたまからリン、とさみしいおとがした。



「おじさん　さみしいんだね」
「ああ、さみしいよ。
みんながわたしのことをしらないと言うたび
わたしはどんどんさびていくようなきもちになるんだ。」

おじさんは、かおのまんなかにあるすうじをさわりながら
けどね、とつづけた。

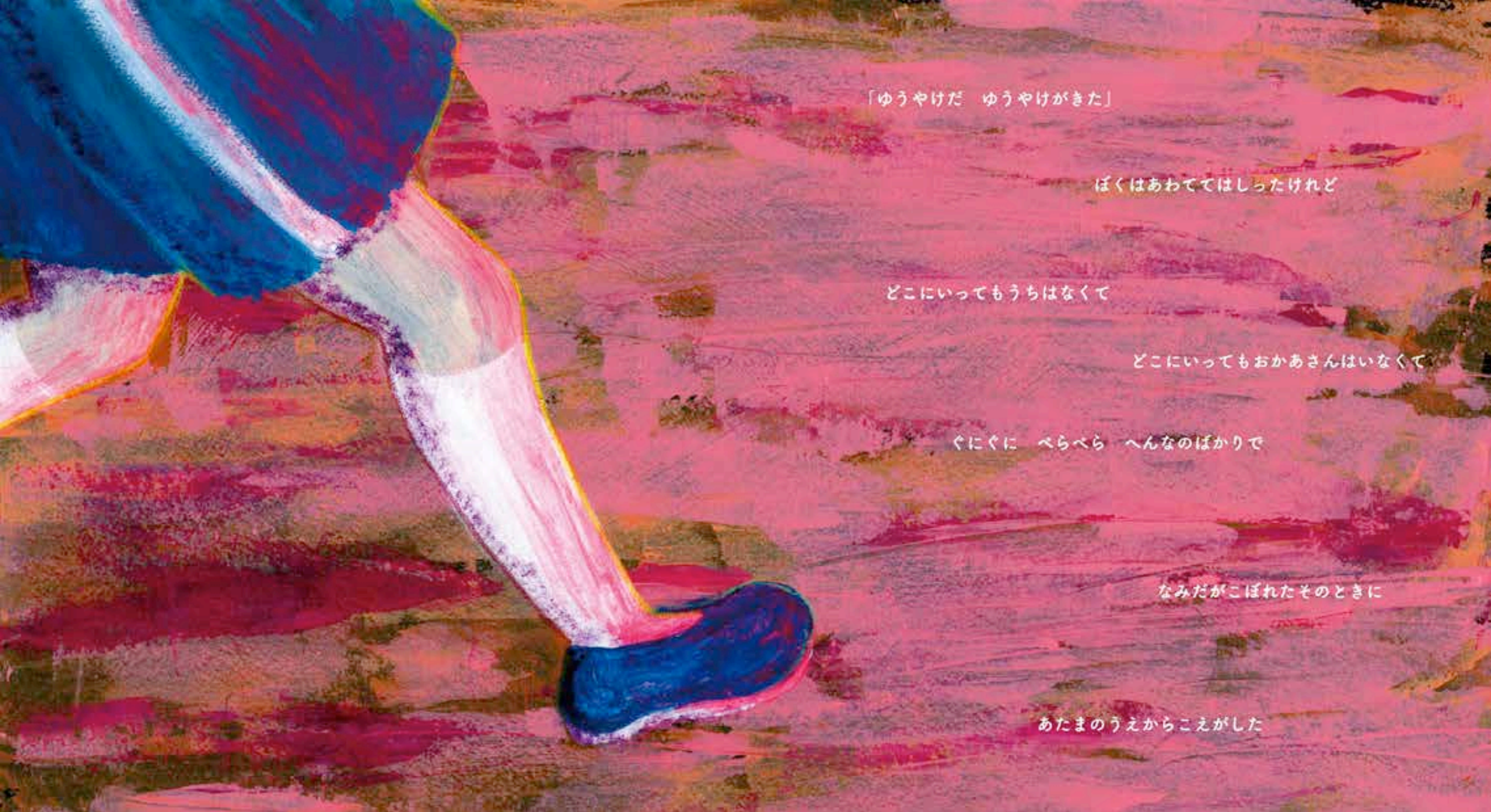
「わたしがわすれられるというのは　よのなかがまえにすすんだってことでもあるんだ。
きみたちのいえにはでんわがある。わたしよりずっとべんりできれいなでんわだ。

わたしはわすれられてずっとここにいるけれど、
きみたちのいえにいるでんわはわたしがいないとうまれなかった。
わたしはそれがほこらしくてたまらないのさ。」

「ふぅん。よくわからないけど
ものってたいへんなんだね。
ねえ、そろそろぼくうちにかえりたいんだ。
どうしたらいいかおしえてよ」
「ああ　おしえてあげようとも。えっとねえ」
そのとき、おじさんのあたまがりんりりりんとなった。

とたんにおじさんは
「でんわだ　でんわだ　でんわです」と
はしっていって

まっかになった　じめんに　ぽつんと
ぼくのかげだけが　のこった



「ゆうやけだ　ゆうやけがきた」

ぼくはあわててはしったけれど

どこにいってもうちはなくて

どこにいってもおかあさんはいなくて

ぐにぐに　べらべら　へんなのばかりで

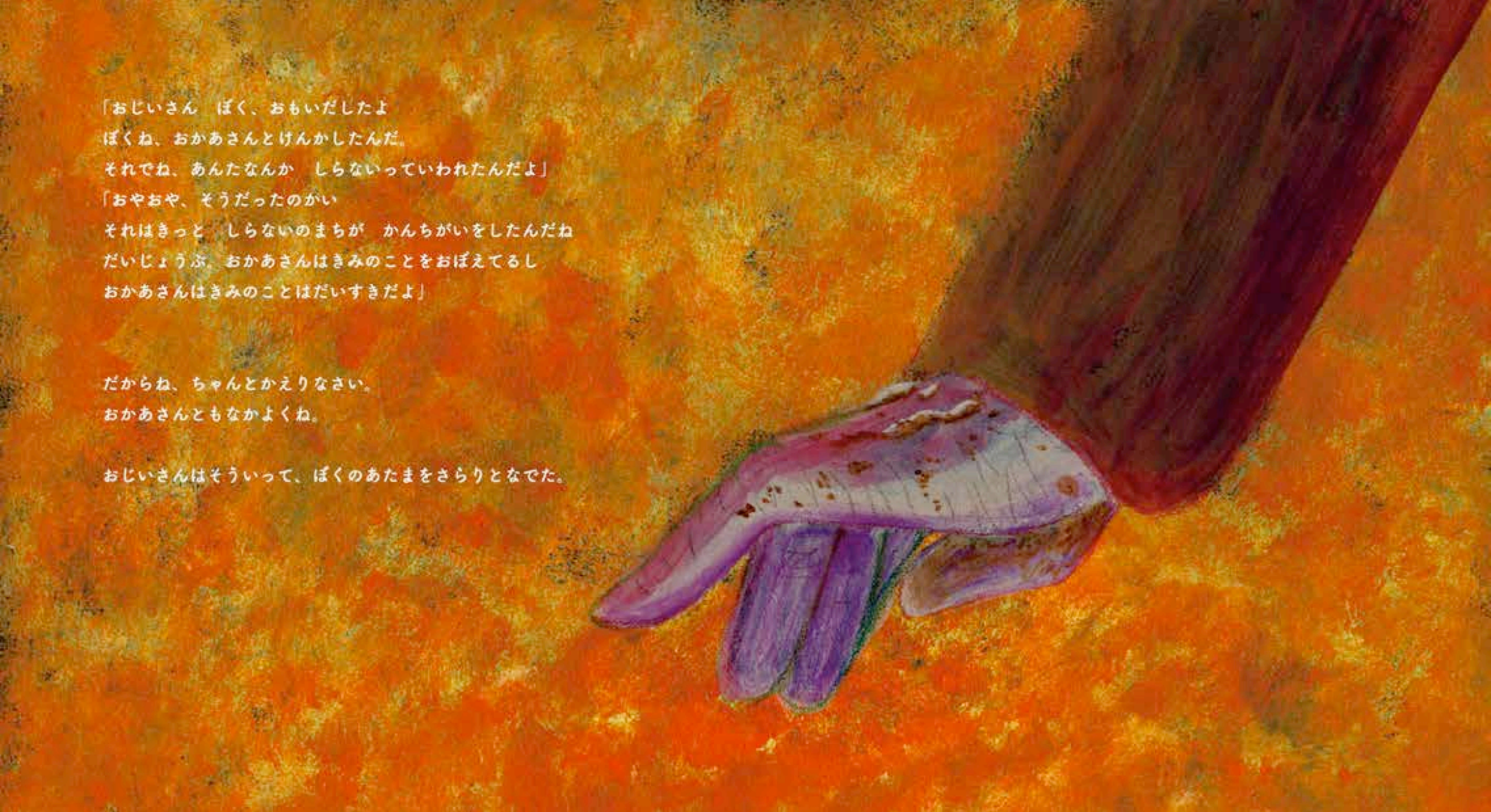
なみだがこぼれたそのときに

あたまのうえからこえがした

「きみはどうして　ここにきたんだい」
みたことなくて　しらないけれど　ごつごつしてない　べらべらでもない
ふつうの、しわくちゃの　おじいさんだった

「おじいさん　ぼく　おうちにかえりたいんだ
なんでここにきたのか　わかんないんだ」

「ああ　ああ　それはかわいそうに
ほら、おうちは　こっちだよ」
おじいさんさんはぼくのてをにぎって
そうしてふたりで　とぼとぼあるいた



「おじいさん　ぼく、おもいだしたよ
ぼくね、おかあさんとけんかしたんだ。
それでね、あんたなんか　しらないっていわれたんだよ」
「おやおや、そうだったのかい
それはきっと　しらないのまちが　かんちがいをしたんだね
だいじょうぶ。おかあさんはきみのことをおぼえてるし
おかあさんはきみのことはだいすきだよ」

だからね、ちゃんとかえりなさい。
おかあさんともなかよくね。

おじいさんはそういって、ぼくのあたまをさらりとなでた。

きがついたら　ぼくはうちにいた。

かいだんのしたから　おかあさんによばれたきがして
ぼくはいそいで　かいだんをおりた

「おかあさん」
ぼくがさけんだら、おかあさんはびっくりしていた。
「あのね、ごめんね、ぼくね、そのね」
「あらあら、こわいゆめでもみたの？
ねえ、ところで　これをみて」
おかあさんは　おおきながくぶちをとりだして
「これね、あなたのひいおじいちゃんよ。
そうじをしてたら　でてきたの」

「あっ、あのおじいちゃんだ！」
「あらあら、ほんとにねぼけてるのね。
あなたは　ひいおじいちゃんにあったことも　はなしたこともないでしょう？
なんにもしらない　はずでしょう？」
「うん。しらない。・・・だからね。」

「しらないから、おしえてほしいな！」

しらないのまち

はなし　かわぶち みさと

え　さいの せいな

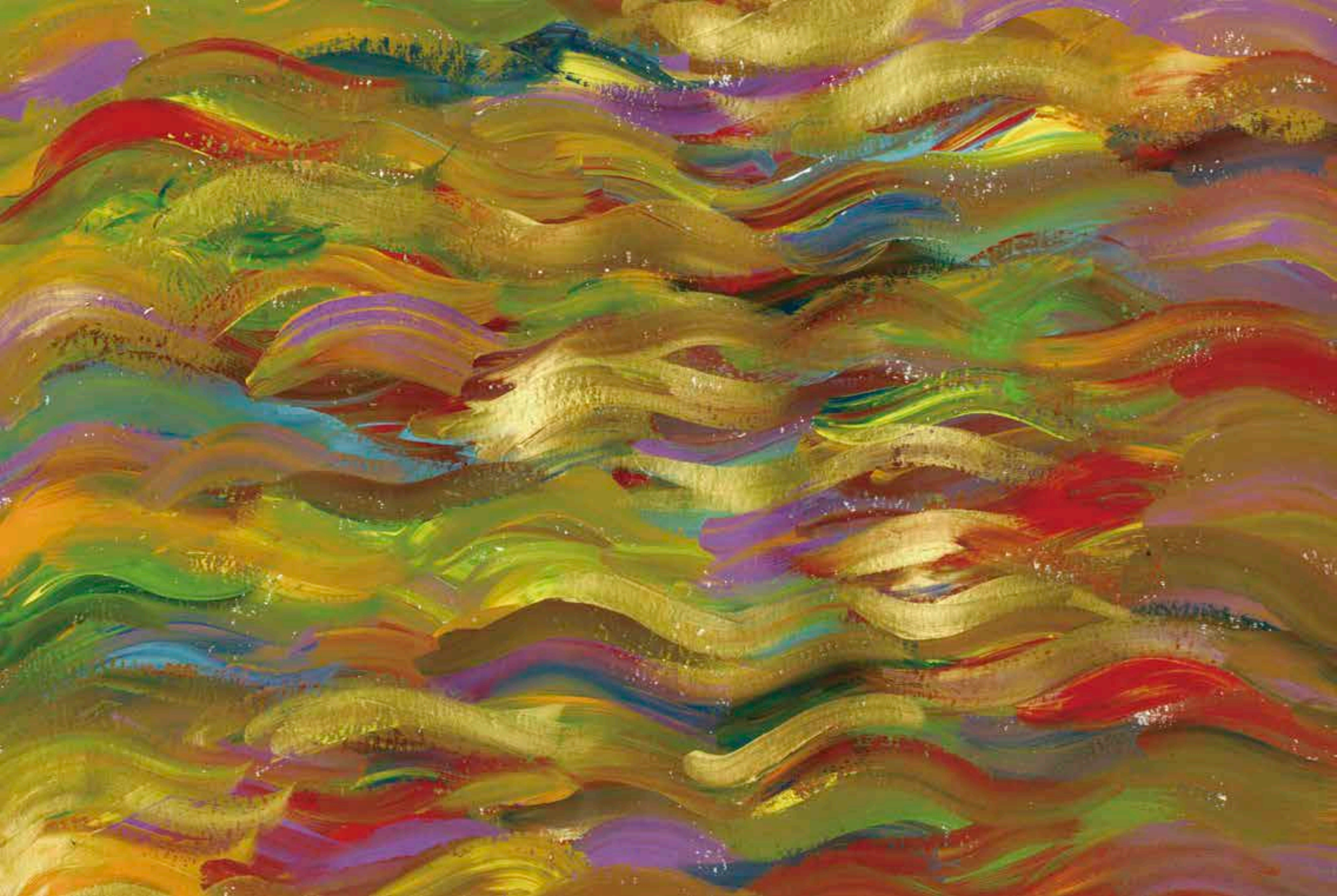
2013 年 9 月 23 日　　第一刷発行
発行者　才野星奈
印刷所　神戸芸術工科大学
本文　縦 20.5× 横 36cm

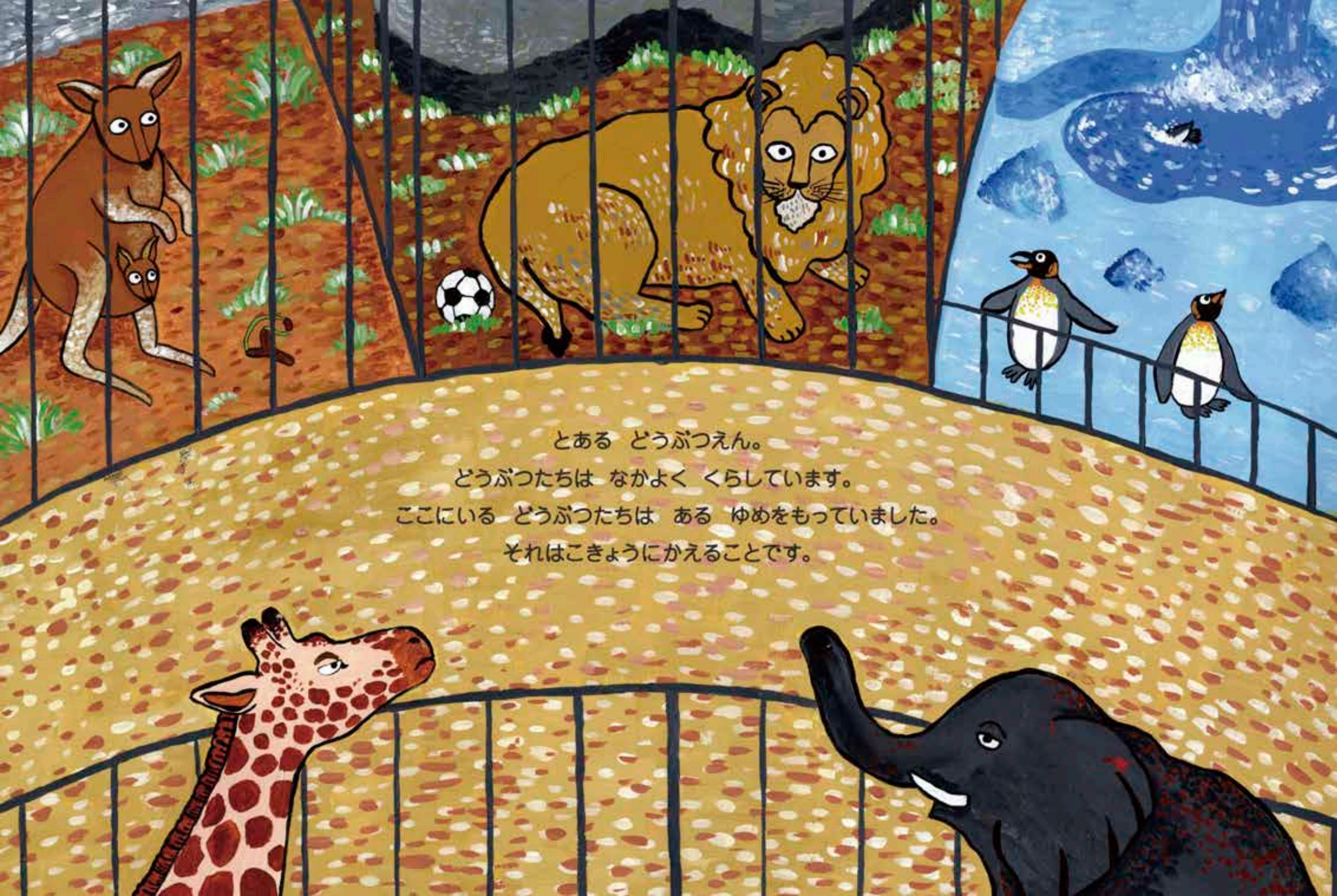
11V0039　才野星奈

どうぶつえんのよる
さく・え なかい あかね
どうぶつえんのよる
なかい あかね

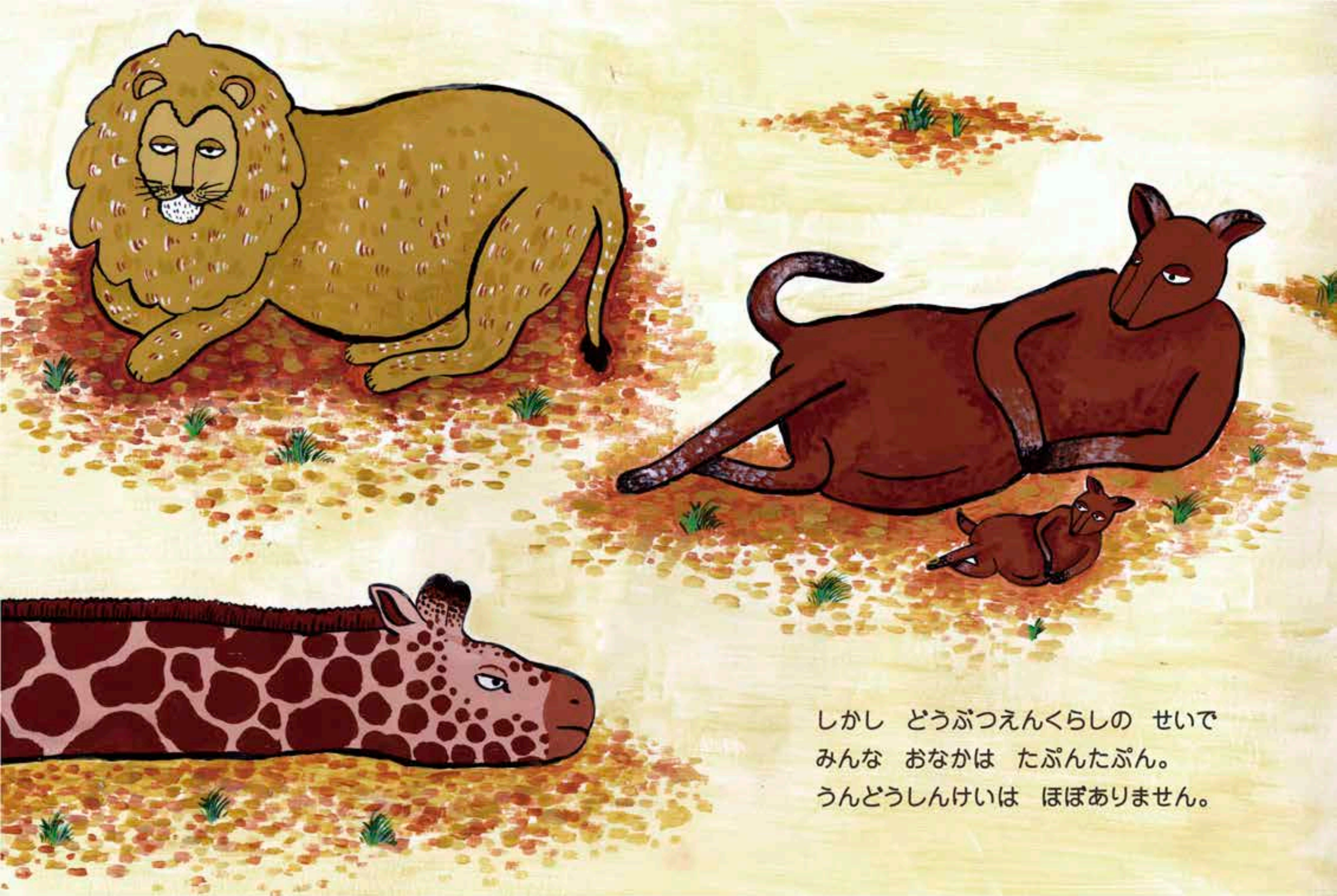
どうぶつえんのよる

さく・え　なかいあかね





とある　どうぶつえん。
どうぶつたちは　なかよく　くらしています。
ここにいる　どうぶつたちは　ある　ゆめをもっていました。
それはこきょうにかえることです。



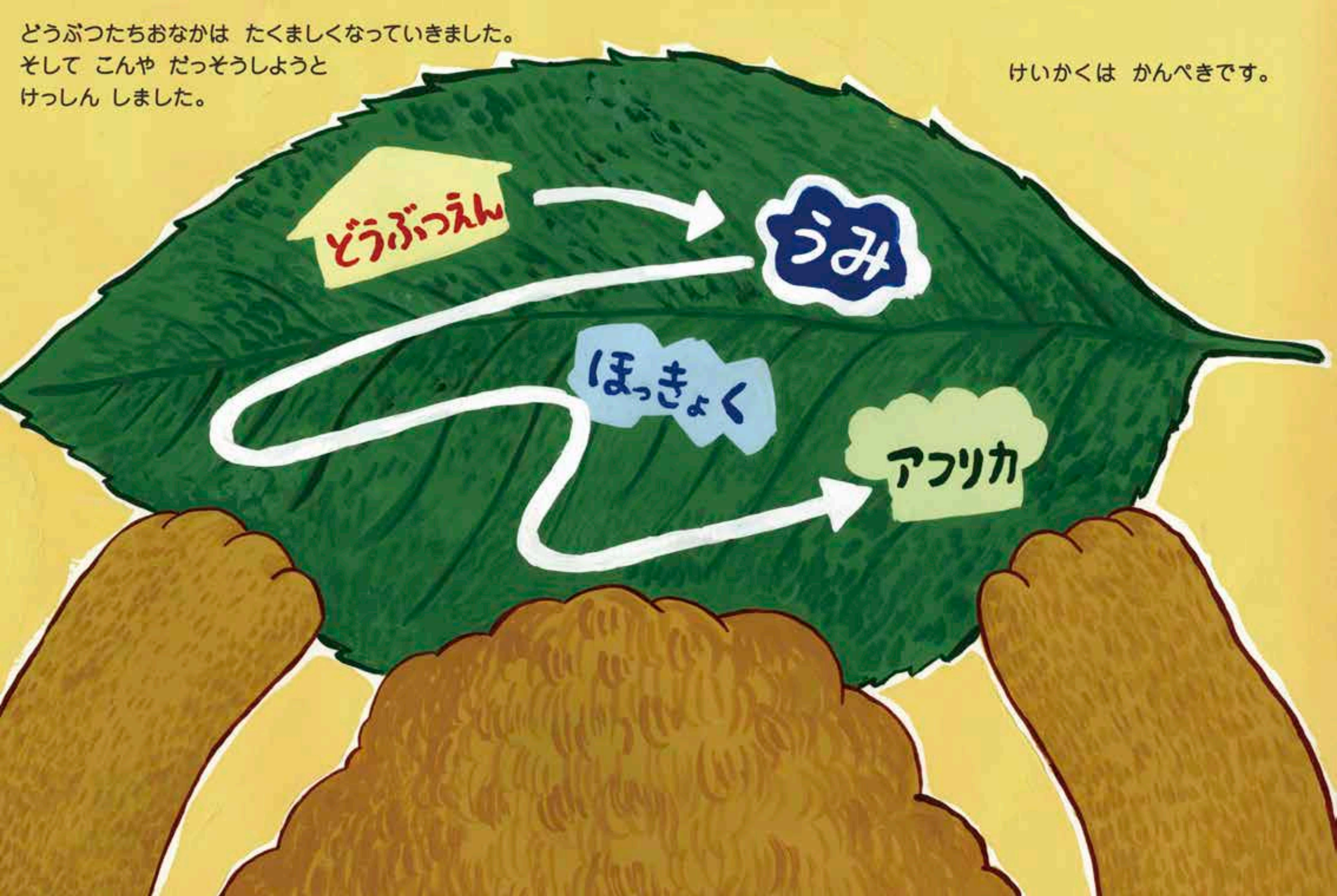
しかし　どうぶつえんくらしの　せいで
みんな　おなかは　たぷんたぷん。
うんどうしんけいは　ほぼありません。

このままでは　だめだと　おもった　どうぶつたちは
よなよな　トレーニングを　はじめました。

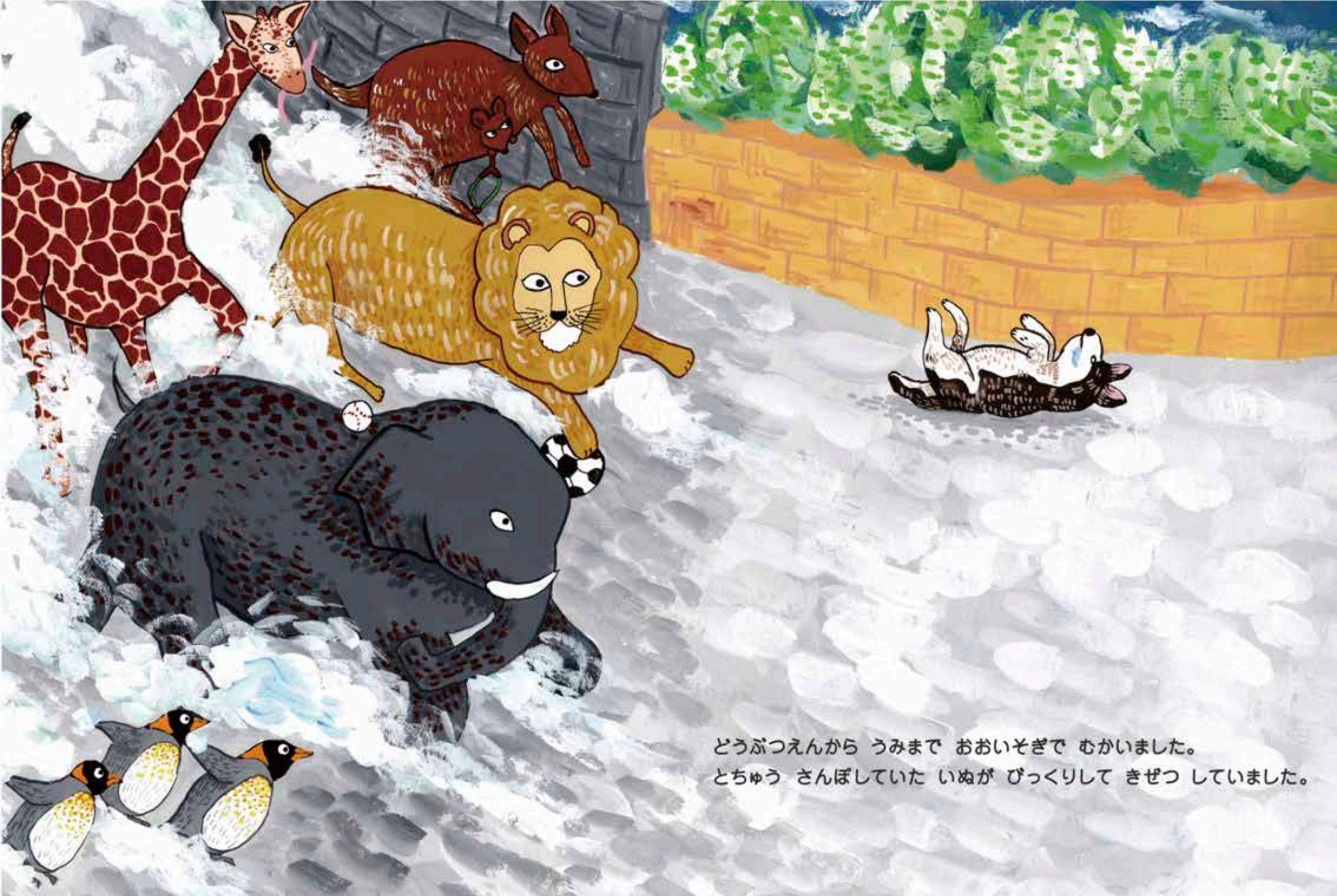
トレーニングの　ほうほうは　みんな　それぞれ　ちがいました。

どうぶつたちおなかは たくましくなっていきました。
そして こんや だっそうしようと
けっしん しました。

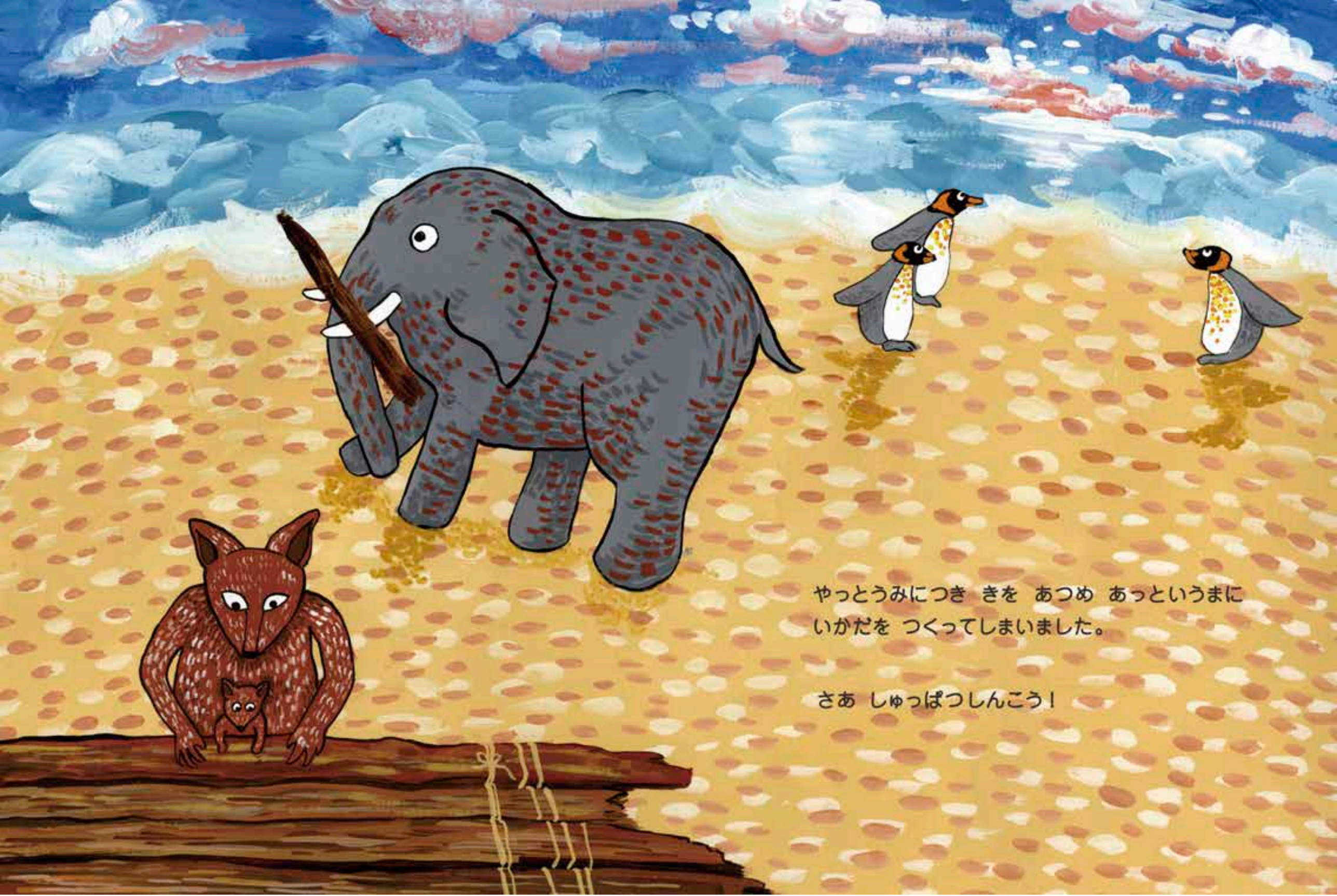
けいかくは かんぺきです。



よる　どうぶつたちは　じぶんの　おきにいりの　おもちゃをもち
かるがると　さくを　のりこえました。
ひびの　トレーニングの　けっかが　でたようです。

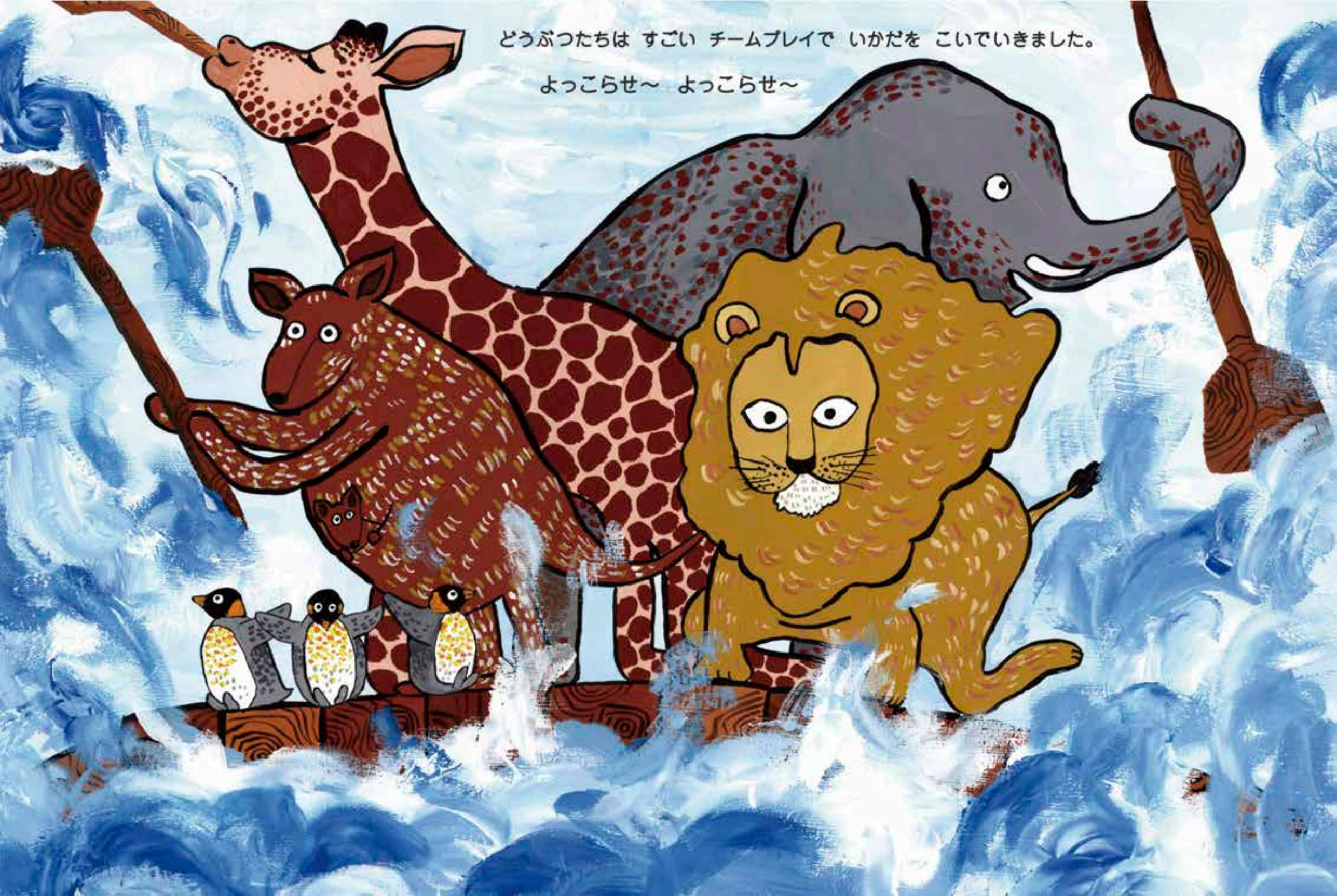


どうぶつえんから うみまで おおいそぎで むかいました。
とちゅう さんぽしていた いぬが びっくりして きぜつ していました。



やっとうみにつき きを あつめ あっというまに
いかだを つくってしまいました。

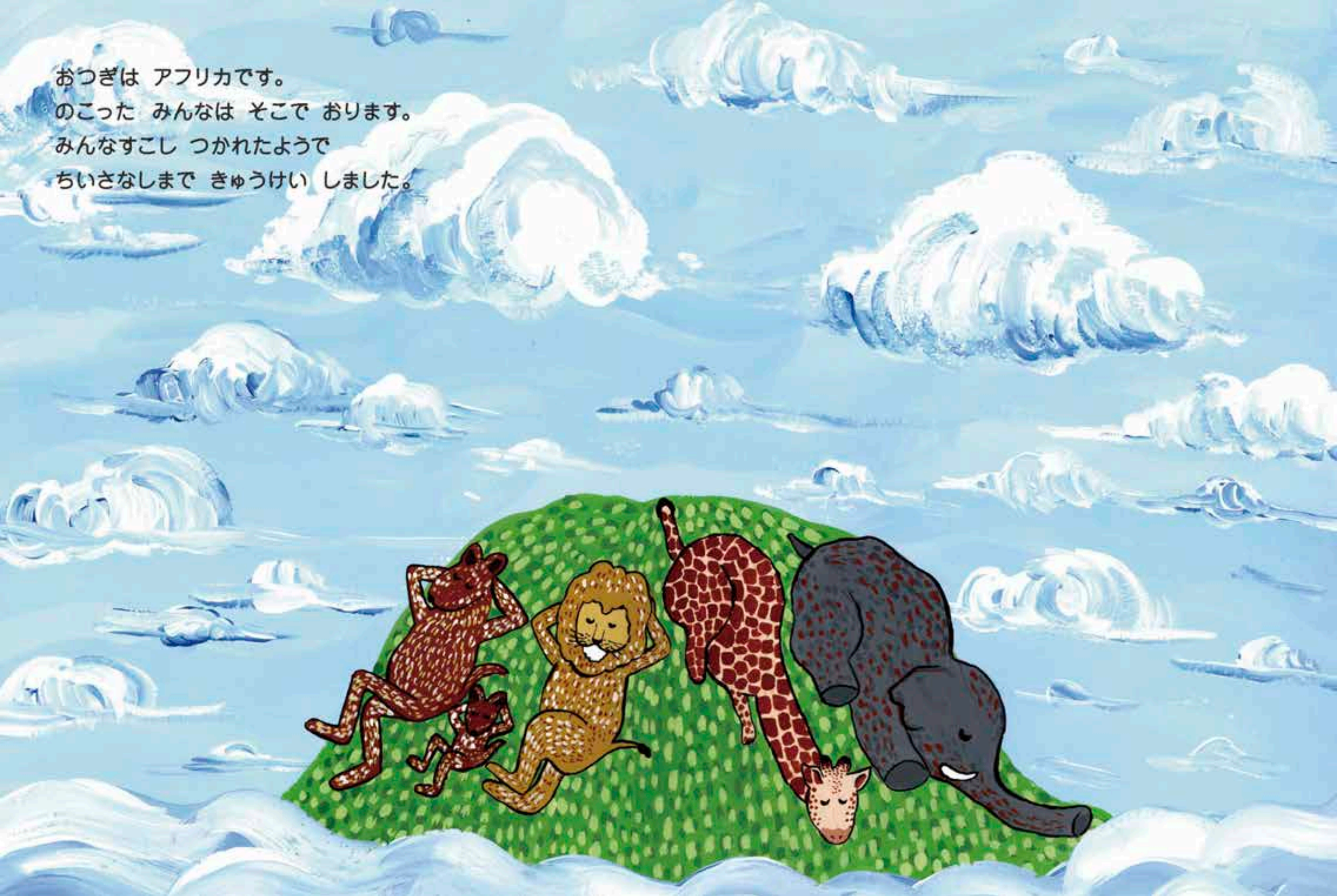
さあ しゅっぱつしんこう！



どうぶつたちは すごい チームプレイで いかだを こいでいきました。

よっこらせ～ よっこらせ～

ほっきょくに つきました。
ここで ペンギンさんたちは おわかれです。
「さようなら〜！またあえると いいね〜！」
そしてふねは しゅっぱつしんこう。



おつぎは アフリカです。
のこった みんなは そこで おります。
みんなすこし つかれたようで
ちいさなしまで きゅうけい しました。

げんきになったところで　またまた　しゅっぱつしんこう。

アフリカまで　あとちょっと！
よっこらせ～よっこらせ～

ついに アフリカに　つきました！ みんなおおよろこびです！

それから どうぶつたちは
まいにち アフリカの だいちをかけまわり
たのしいまいにちを すごしました。

どうぶつえんのよる　さく・え なかい あかね

2013年8月3日 発行　12V0059 中井 茜 / 第1刷　ねこねこ書店